令和４年度　市川市立図書館評価報告書

令和６年２月

１．趣旨

この報告書は、「図書館法」（昭和25 年法律第118 号）第７条の３、「図書館の設置及び運営上の望ましい基準」（平成24 年文部科学省告示第172 号）、「市川市立図書館の設置及び管理に関する条例施行規則」（平成21 年教育委員会規則第６号）第１条の２及び「市川市中央図書館の管理に関する規則」（平成６年教育委員会規則第９号）第２条に基づき、令和４年度の市川市立図書館の運営状況について評価・分析を行いサービス向上に資するものである。

２．評価内容

「市川市立図書館運営基本計画」第３章 実施計画編（令和３年度～令和５年度）の具体的な施策に沿って行った取り組み内容と、目標値等の達成度に基づき、令和４年度の市川市立図書館の評価を行った。

３．評価の基準について

市川市立図書館の「7 つの施策の方向」の各項目ついて、取り組み内容と目標値の達成度を総合してＡ～Ｄの４段階評価を行った。これに基づき、総合結果として「3 つの柱」についての取り組みを４段階評価で表した。(3 つの柱と 7 つの施策については市川市立図書館運営基本計画 p.7 を参照)

実施内容	評価
十分達成できた。　（目標どおり取り組みを実施し、目標を上回る成果があった。）	A
概ね達成できた。　（目標どおり取り組みを実施し、一定の成果をあげた。）	B
やや不十分だった。（実施したが、十分な成果をあげることができなかった。）	C
不十分だった。　（実施できていない。課題の整理、計画の見直しが必要である。）	D

４．自己評価結果

令和４年度は、「市川市立図書館運営基本計画」の３つの柱のうち「子どもの成長をサポートする図書館」、「地域の文化を育み、豊かなまちづくりを支える図書館」の２つについては、目標を達成することができＡ評価となった。子どもへのサービスについては、新型コロナ感染防止に配慮しながら行事の実施回数を増やすことができ、「市川市子どもの読書活動推進計画第二次」を策定したことにより今後の具体的な取り組みも明確化された。また、地域行政資料についてはこれまで同様に積極的な収集を行うと同時に、行事や展示等による行政各部署との連携の充実を図ることができた。

「情報拠点として市民の学びを支える図書館」については、自動車図書館ステーションの増設等の非来館型サービスの拡充が行えたものの、蔵書の受け入れ冊数が目標値未満であったことや、大学図書館との連携がコロナ禍以前に戻っていないことなどからＢ評価となった。

全体としては、昨年度と同様に７つの施策の方向のうち４つがＡ評価、３つがＢ評価であったが、令和４年度の目標は概ね達成でき、一定の成果をあげたと評価できる。

５．令和４年度市川市立図書館評価に対する外部有職者からの意見　…詳細は別紙

外部有識者２名（図書館情報学）から、令和４年度の市川市立図書館評価についてご意見をいただき、自己評価は概ね適切であると認められた。また、実施結果や評価方法に対していただいた課題やアドバイスについては、今後の図書館運営に活かしていく。

令和4年度 「市川市立図書館運営基本計画」に基づく図書館評価結果

総合結果

1. 情報拠点として市民の学びを支える図書館

評　価	□A〔十分達成できた〕	■B〔概ね達成できた〕	□C〔やや不十分だった〕	□D〔不十分だった〕

令和４年度は、令和３年同様資料費減が続いたため、蔵書の目標値に達しなかった。しかし、新型コロナウイルス感染症の流行（以下、「コロナ禍」とする）が続く中、一年を通して通常開館を維持し、大きな混乱もなく順調に運営を維持できた。また、制限をしていた座席も通常に戻す際にその運用を一部見直しし、座席の一部を学習席として機能させることにより、利用者の利便性に応えることができた。

コロナ禍による社会の変化に伴い、既存のサービスの見直しを求められる中で、自動車図書館ステーションの増設や、宅配サービスの見直し、動画の配信といった非来館型サービスの拡充を図った。今後も電子資料の導入等も含め、幅広い情報が身近なところで受け取れることができるよう検討を行う。

2. 子どもの成長をサポートする図書館

評　価	■A〔十分達成できた〕	□B〔概ね達成できた〕	□C〔やや不十分だった〕	□D〔不十分だった〕

イベントの再開後、えほんの会やYAサポーター活動等、感染防止に努めながら回数を増やしていった。同時に中高生の本の紹介POPの展示、子ども向けパスファインダーの作成なども引き続き行った。

蔵書数は目標に達成しなかったものの、学校図書館支援センター事業においては、依頼や貸出件数は増加した。

「市川市子どもの読書活動推進計画第二次」（令和5～7年度）を策定し、乳幼児絵本の配布やボランティアの育成・連携等も検討した。今後も、子どもの発達段階に応じて、より多くの本に出会う機会を創出し、興味や好奇心を持たせるような読書体験をさらに広げる取組に努めていく。

3. 地域の文化を育み、豊かなまちづくりを支える図書館

評　価	■A〔十分達成できた〕	□B〔概ね達成できた〕	□C〔やや不十分だった〕	□D〔不十分だった〕

地域行政資料は、情報や資料の収集、保存、発信といった意味合いにおいては、コロナ禍に関係なく十分に目標を達成することができた。また、継続的に行政各部署と連携した行事や展示を行い、必要な行政情報を市民に提供することができた。

今後もデジタルアーカイブ・システムでの公開に向け、地域資料のデータ整備等の作業を進めていくほか、地域情報データベースの更新等、サービスの充実に努めていくと共に活用を PR していく。

令和４年度の取り組み内容

一つめの柱　情報拠点として市民の学びを支える図書館

施策の方向　1－(1)「様々な市民の学習要求に応えられる、蔵書の収集と維持」

具体的な施策	実施事業	目標値等	結果	評価
①蔵書の維持と更新	・新規資料の受入れと劣化資料の買い替えによる蔵書の適正な維持（購入と寄贈の合計冊数）	50, 000 冊	34,814 冊	B
②利用に応じた様々な形態の資料の充実	・利用しやすい電子資料等の収集についての調査及び導入の検討	調査・検討	一部実施	
	・障がいの特性に応じた資料の収集と目録の整備	点字図書の統合目録の作成	点字図書の統合目録の作成	
③効果的な蔵書管理	・全館的なICタグによる蔵書管理の発展的な実施の検討	IC機器の活用	IC機器の活用拡大	
④資料保存のための書庫の確保	・中央図書館の書庫への可動式集密書架の設置と活用	可動式書庫の活用	可動式書庫の活用	

実績と評価

コロナ渦が続いたが、令和４年度は通年開館することができ、セルフ貸出機の利用も市民に浸透してきた。市川駅南口図書館と行徳図書館の IC タグ関連機器のリプレースを実施し、行徳図書館のセルフ貸出機の増設やハンディ型の蔵書点検機器を導入し、貸出の待ち時間の短縮や蔵書点検の迅速化を図った。資料の受入れ冊数は目標値の 69.6%に留まったが、寄贈資料の積極的な活用に努め、昨年度より増加した。電子書籍については３月に市川駅南口図書館で導入し貸出を開始した。

課　題

市民のニーズに応えるために、引き続き紙資料の充実は必要である。電子書籍については一部市川駅南口図書館で導入したが、全館で導入する際には、紙資料との併存やその特性を活かした利用ができるよう、子どもや障がい者等、利用対象を絞った資料選定を行うなど、いくつかの導入パターンを検討しておく必要がある。

方向性

限りある予算を有効に活用するために、市全体としての蔵書のバランスや電子書籍の活用方法を考慮し、的確な資料選定を行っていく。

施策の方向　1－(2)「図書館機能を活用した、生涯学習機会の提供と充実」

具体的な施策	実施事業	目標値等	結果	評価
①レファレンスサービスの充実	・レファレンスツールおよび事例集の提供	継続発行、発展	継続発行、発展（発行数 17）	A
	・市内外の図書館等との連携の強化（レファレンス協同データベースへの事例提供）	実施（200 点以上）	実施（206 点）	
	・市民の学習要求や調査研究に応えるデータベース等の提供及び利活用の促進	実施	実施	
②利用しやすい情報環境の整備	・図書館ホームページ、デジタルコンテンツ等の情報環境の整備	整備・実施	実施	
	・非来館型サービスについての調査及び導入の検討	検討・実施	検討・実施	
③生涯学習機会の拡充	・中央図書館及び地域図書館、自動車図書館の特性を活かしたサービスの拡充と PR による利用の促進（図書館利用登録者数の拡大）	前年度比増（前年度 22,840 人）	30,596 人	
	・北部地域の図書館サービスの拡充	実施・周知	実施・周知	
	・イベントの開催や地域イベントへの参加・協力	検討・実施	実施	

実績と評価

レファレンスサービスは、全体で 47,910 件と、前年度の 52,489 件よりは減少したものの、事例集である「参考業務月報」から名称変更した「あれこれふぁ」を 11 回発行したほか、パスファインダーを 6 号発行し、レファレンスツールおよび事例集の提供数については前年度を上回ることができた。それらの事例等をレファレンス協同データベースに提供した結果、データ登録数が全国の基準を上回り、国立国会図書館から 14 回目の感謝状を受け取った。また、図書館ホームページでは、OPAC で本を検索する方法を紹介した動画を公開した。自動車図書館車両の更新に伴い車両を小型化したことにより、これまで巡回できなかったところも含めて、ステーションを 18 から 25 か所に拡大し、特に北部地域のサービス拡充を図った。イベントについては、感染防止策をとりながら段階的に実施した。図書館利用登録者数は、前年度比 134%となったほか、実利用者数も 1,290 人多い 58,491 人となった。

課　題

外部データベース等のサービスの環境整備を進めるとともに、PR の方法を工夫し、新規登録者等の拡大に繋げていく必要がある。

方向性

対面サービス等の、感染防止対策を行いながら新型コロナウイルス感染拡大前の状況に戻すもの、Web を活用したサービス等のコロナ禍での経験を踏まえて継続・拡大していくべきものを見極め、来館型・非来館型サービスのバランスよい実施を心がけていく。

施策の方向　1－(3)「関連機関とのネットワークの充実と、質の高いサービスの提供」

具体的な施策	実施事業	目標値等	結果	評価
①関係機関との連携による、各地域における図書館サービスの充実	・関連施設との連携による図書館サービスの充実	実施	実施	B
②大学図書館との連携と利用の促進	・市民の大学図書館利用のための紹介状の発行	実施	実施（1 件）	
	・市内大学及び大学図書館と市立図書館の各種行事等の相互 PR と利用の促進	実施	中止	
	・大学生の図書館実習、インターンシップ等の受入れ	実施	実施	
③ボランティアとの連携強化	・図書館友の会と連携した行事等の実施とボランティア活動の支援	検討	実施（1 回）	
	・障がい者サービス関連のボランティアと連携した、障がい者向け資料の作製と収集	実施（20 点）	実施（23 点）	

実績と評価

コロナ禍の中、図書館友の会は活動を停止していたが、連絡を取り合い共催行事としてリサイクルブック市を実施することができた。また、障がい者サービス関連のボランティアからは、点字資料や DAISY 図書などの成果物 23 点を受取り、目標値を上回ることができた。

大学の図書館実習は、前年度に引き続いて実習期間を短縮して 1 名実施し、インターンシップの受入れも 1 名行った。一方で、千葉商科大学及び和洋女子大学との協働については、前年度と同様に学外者が入構できなかったため、紹介状の発行や相互利用のPR等は実施できなかった。

課　題

新型コロナウイルスの 5 類感染症移行に伴い、休止されていたボランティア活動等が順次再開されていくことになるが、適切な感染対策や再開後の内容等について、関係機関と連携を進めていく必要がある。

方向性

大学や関連施設、ボランティア等の地域住民との連携により、図書館サービスの充実を目指す。また、図書館実習等については、実習生に館内の掲示物の作成を依頼する等の試みも検討していく。

二つめの柱　子どもの成長をサポートする図書館

施策の方向　2－(1)「発達に応じた豊かな読書のための環境整備」

具体的な施策	実施事業	目標値等	結果	評価
①児童・青少年資料の充実	・子どもの発達段階に応じて豊かな読書体験ができるような資料の収集と更新（購入と寄贈の合計冊数）	9,000 冊	7,694 冊	A
②行事の実施と情報の発信	・子どもの読書活動の推進のための行事の実施と情報の発信	継続実施	継続実施	
③レファレンス・読書相談の実施	・調べ物に役立つ資料の充実や探し方についてのレファレンスツールの整備	レファレンスツールの作成	レファレンスツールの作成	
	・大人に対しての子どもの本についての読書相談等の実施	実施	実施	
④ヤングアダルトサービスの実施	・中学・高校生のもつ課題の解決（学習、生活、進路等）を支援するための資料の提供	実施	実施	
	・図書館と中学・高校生を結びつける行事の実施や刊行物の発行	実施	実施（30 回）	
	・中学・高校生へのヤングアダルトサービスの PR	実施	実施	

実績と評価

資料の充実については、昨年度に引き続き本の単価が上昇し、購入冊数は減少したが、寄贈書の受入で補うことで、受入れ冊数の達成率は目標値の約 85.5%と昨年度より上昇した。

行事の実施については、感染拡大防止策を講じながら、「えほんの会」等の定例イベントの回数を増やし、「こわいおはなし会」等、季節毎の特別イベントを再開した。非接触型の取組として「くま館長からの挑戦状」「わくわくいっぱいふくぶくろ」は、昨年度の倍以上が貸出された。YouTube 動画は 13 本作成、館内のサイネージでも数本配信し、子どもの読書欲を掻き立てる試みを継続した。パスファインダーは、伊能忠敬とユニバーサルデザインについて取り上げた。大人への読書相談等として、新井親子つどいの広場で講座「絵本のことを司書さんに聞いてみよう」の講師を職員がつとめた。

ヤングアダルトサービスでは、夏休み期間にイベント「YA“夏季”氷本」、冬に「YA 図書館本 A-Z」を引続き実施し、「YA通信」「YA通信　入門編」等の刊行物は継続的に発行・改訂した。また、図書館やYAコーナーをPRするボランティア「YAサポーター」活動を再開し、16 回延べ 20 人が参加し、本の POP 作成、イベントの手伝い等行った。また、「市川市子どもの読書活動推進計画第二次」（令和5～7年度）の策定作業を行い、予算確保はかなわなかったが、乳幼児サービスであるブックスタート事業の見直しを行った。

課　題

乳幼児サービスの展開、子どもの保護者に向けたPRなど。

方向性

行事の回数をコロナ禍より前に戻すとともに、「市川市子どもの読書活動推進計画第二次」（令和5～7年度）にも基づき、子どもの発達段階に応じた様々な取り組みを実現していく。

施策の方向　2－(2)「公共図書館と学校等との連携の強化」

具体的な施策	実施事業	目標値等	結果	評価
①出張おはなし会・学級招待の実施	・「出張おはなし会」「学級招待」の対象学年の拡大とプログラムの充実	実施充実	実施（6 件）	B
②調べ学習及び読書環境向上のためのサポート	・教育センターが所管する「学校図書館支援センター事業」への参加と協力	継続実施	継続実施（資料依頼 507 件）	
	・学校図書館向け貸出資料の更新	前年度並（260 冊）	65 冊	
	・外部機関等と連携した児童・青少年サービスの実施・充実	実施	実施	

実績と評価

「学校図書館支援センター事業」については、再開し、昨年度より依頼件数、貸出冊数は増加した。但し、実際の人の動きについては、「出張おはなし会」はコロナ禍で中止、「学級招待」等は6回実施にとどまった。ヤングアダルト特集展示のためのポスター募集や借用POP等の館内展示は継続し、一般利用者が目にするように工夫し、広く利用された。他機関との連携としては、文学ミュージアムの星野道夫展において、関連本の読み語りを実施、こどもから動物が登場する本の紹介を募集した。また、よみっこ運動から本の寄贈を受け、同団体主催のビブリオバトルで紹介された本のPOPを三館（中央・行徳・駅南）で展示し、好評であった。

課　題

学校図書館向け貸出資料の内容が古びてきたため、計画的に更新・購入していく必要がある。

方向性

「市川市子どもの読書活動推進計画第二次」（令和5～7年度）に基づき、学校のほか、市内の子ども子育て施設等の外部機関を通して、子どもと保護者に向けて読書の大切さをPRし、積極的に読書支援、図書館利用の促進を図る。

三つめの柱　地域の文化を育み、豊かなまちづくりを支える図書館

施策の方向　3－(1)「市川市の歴史・文化の保存と継承」

具体的な施策	実施事業	目標値等	結果	評価
①地域資料の収集と提供	・地域行政資料の収集と整理 （地域行政資料の蔵書冊数）	前年度比増 （62,069 冊）	62,973 冊	A
②地域資料の保存	・地域行政資料の電子化	継続実施	実施	
③地域情報の積極的な発信	・図書館ホームページの地域情報の追加及び更新	実施	実施	

実績と評価

地域行政資料は、寄贈を中心に、新刊書から古書まで積極的に収集した結果、蔵書冊数は目標値を上回ることができた。以前から準備を進めていた『京葉市民新聞』のデータを館内Web-OPACのデジタルアーカイブ・システムで公開したほか、『大柏川第一調整池緑地だより』のデータ提供を受け、デジタルアーカイブにおけるインターネット公開に向けてデータの登録等の準備を進めている。

また、地域資料のパスファインダー「市川市ってどんな街？５　市川市の地図を調べる」の改訂版を発行し、ウェブサイトを更新した。

課　題

劣化対策として資料の電子化を計画的に進めていくことが重要だが、全てを電子化することは困難なので、地域行政資料を物理的に永く保存していくために十分なスペースの確保も必要である。また、資料をインターネット公開する際の利用許諾については、個人情報や転載記事の扱い等の注意点を整理し、誰でも扱えるように雛形を整備していく必要がある。収集・保存している資料については、パスファインダーの作成やホームページの活用等、広く市民が利用できる環境整備を行う。

方向性

引き続き、地域行政資料の積極的な収集と受入れに努めるとともに、誰もが必要な情報にアクセスできる環境を目指す。そのために、地域行政資料の整理と著作権保護期間満了資料の電子化を進め、館内で公開するデジタルアーカイブの活用を図っていく。

施策の方向　3－(2)「行政の情報拠点としての役割」

具体的な施策	実施事業	目標値等	結果	評価
①行政情報の市民への提供	・行政各部署や関連団体と連携した行事や展示等の実施	継続充実	実施充実 （12 回）	A
	・市の刊行物等の販売及び行政情報リーフレット等の配布	継続実施	販売の再開	
②行政各課への情報発信	・図書館で利用できるデータベース等、レファレンスツール情報の市の行政各部署への発信	実施	実施	

実績と評価

行政各部署や関連団体と連携した展示は、危機管理課、健康支援課、地域支えあい課、商工業振興課、市内学校等と実施し、毎年継続して行っている展示については、展示する視点・観点を変え、連携内容を充実させた。特に POP を用いた資料展示を多く行ったところ、お薦めした図書がよく利用されていた。また、市の刊行物の販売については、5 月から再開することができた。

図書館からの情報発信としては、図書館だよりをカラーで発行し、参考業務月報を「あれこれふぁ」にタイトル変更するなど、情報が目に入りやすい工夫を行った。また、市の行政各課が行う事業の事前調査のために、図書館が利用される事例もあり、調査依頼に対応するとともに図書館機能を紹介するなど PR に努めた。

課　題

行政各部署に向けて、図書館が行政情報の集約・整理に努めていることを周知させていく必要がある。そのためには、図書館側からの積極的な呼びかけを継続的に行うことが課題であり、目に見える形として、行政情報に関するパスファインダーの作成に取り組み、これを情報発信していく。

また、市民に向けては、図書館が集約した幅広い行政情報を、誰でも使えるように整理し、わかりやすい形で迅速に情報提供していくことが課題となる。

方向性

行政各部署や市内関連団体等と連携して、市川への理解と愛着が深まるような魅力的な展示やイベントを企画するほか、身近な行政情報や市川の魅力を市民に積極的に提供していく。

また、行政各部署に対しては、図書館で利用できるデータベース等、役立つツールの効果的な活用法をわかりやすくPRし、図書館のレファレンス機能を地域の課題解決や各部署の事業運営に役立ててもらえるよう情報発信をしていく。

令和４年度　市川市立図書館評価に対する外部有識者からの意見　（別紙）

３つの柱に対する、図書館の自己評価、今後の課題等について、外部有識者（図書館情報学）２名から意見をいただいた。

１．情報拠点として市民の学びを支える図書館

・コロナ禍、資料費減の厳しい環境のなかで、必要とする取り組みが着実になされたと考える。

資料の受入冊数が目標値の 69.6%にとどまったのは、前年度と同様に資料費の減によるものであるが、寄贈資料の活用と除籍数の抑制によって、年間増加冊数が前年度から微増となるなどの努力が認められる。また、コロナ禍が続くなか、通常開館に復し、自動車図書館ステーションの増設など、さまざまなサービスの改善に努め、図書館利用登録者数が前年度から 34％の増加となったことは高く評価される。しかしながら、年間貸出冊数が前年度から 2.7%の減となったことは、資料費の減が直接に影響したものと憂慮している。資料の選択にいっそう留意されるとともに、資料費増への取り組みをお願いしたい。

・資料に関しては、「量」のみでなく「質」も大切であり、受入れ冊数は目標値には届かなかったものの、必要性の高い資料が収集されているのではないかと推測する。「質」という意味では、寄贈資料の活用や電子書籍の導入など、蔵書の「幅」を拡げる取り組みは高く評価できる。

生涯学習における図書館機能の活用という点でレファレンスサービスの充実は重要であるが、事例集やパスファインダーの発行などから見て取れるとおり、積極的な取り組みがなされている。また、OPAC による検索方法を紹介した動画を公開するなど、活用を促進する工夫が進められていることにも注目したい。今後も、ウェブを中心とした非来館型サービスについて、ニーズを見極めつつ、来館型サービスと適切なバランスを持って展開してほしい。

友の会、ボランティア、大学との連携を着実に再開・進展させることができている。今後は、必要に応じて新たな連携先の開拓なども視野に入れつつ、図書館「外」との協働がさらに充実していくことを期待したい。

２．子どもの成長をサポートする図書館

・子どもへのサービスが全国的に出色の水準にあることは、学校図書館への支援を含め、異論の余地はないと考える。

購入冊数は前年度に続いて減少し、その理由を本の単価の上昇としているが、出版物の平均単価は 2.2％増（出版科学研究所調べ）であるから、資料費の減が大きな理由であろう。一方、対面での多彩な行事を再開するとともに、非接触型行事の実施や YouTube 動画の配信も継続するなど、読書活動推進を高いレベルで維持しており、関係者の尽力を多としたい。

・子ども向け定例イベントの回数を増やしたり、特別イベントを再開したりできたことは、今後に繋がるものと思われる。購入冊数は減少したものの、肝心なのは「質」である。一点一点の資料に目配りの効いた選書がなされていると推測する。YouTube 動画の作成・配信など、非来館型サービスを充実していく方向にも期待が持てる。YA サービスについては、イベント実施や刊行物発行・改定が進められたほか、ボランティア活動も再開されるなど、一定の活動実績が見られる。

学校図書館支援センター事業も再開され、依頼件数・貸出冊数とも増加しており、学校等との連携を進展させる基盤が固められている。今後は、市の読書活動推進計画なども踏まえつつ、子どもの発達段階や（とくに学校における）学習内容などにも配慮しながら、図書館だからこそできる活動を中心に、「子どもの成長」に繋がる取り組みがいっそう拡充されることを期待したい。

３．地域の文化を育み、豊かなまちづくりを支える図書館

地域資料の収集と電子化、行政情報の提供と発信は、地に足のついた事業として定着しつつあると考える。

地域資料の蔵書冊数が前年度から 904 冊の増加となったのは、図書館からの積極的な寄贈依頼によるものと推量され、整備に制約の多いデジタルアーカイブ化の着実な実行とともに、図書館としての力量が示されたものと評価できる。行政各部署などと連携した展示も、図書館からの働きかけが連携先によく理解されていることが伺われ、今後も図書館ならではの提案と創意工夫を期待したい。

・公共図書館の役割として、地域の文化を保存・継承していくことは重要である。目標値を上回る地域行政資料が収集され、地域新聞等のデジタルアーカイブ化が進められるなど、かかる役割を果たすための積極的な姿勢が見て取れる。

行政各部署・関連団体などとの連携も進められ、また、POP を用いた資料展示によって利用を促すなど、文字どおり「行政の情報拠点」として自律的な工夫が見られる点は大いに評価できる。市川の「よさ」をいっそう引き出し、伝え、拡げていくために、図書館としてできることをさらに探っていってほしい。

総 評

・自己評価は妥当であると思料する。

付言すれば、この自己評価は事業実施の事実に着目するものであるが、個々の事業が図書館活動にどう活かされ、市民にどのような変化と行動を促したかについて、あと少し言及されれば、さらに建設的な評価となるように思われる。

・総じて充実した運営がなされている。図書館として高い水準でサービスを展開しているうえに、現在および今後の時代・社会に対応した新たな取り組みも進められており、高く評価できる。職員各位の努力によるところが大きいものと推測する。深く敬意を表したい。

図書館に対するニーズはさらに多様化・高度化していくであろう。すべてに図書館（職員）だけで対応していくことには限界がある。「図書館だからこそ」できるところがどこかを見極めながら、関係団体等との連携・協力を確実に進めつつ、利用者（市民）との多方面での協働を拡げていくことと、テクノロジーの活用によって効率・効果の向上をめざしていくことが持続可能な図書館運営のカギとなっていくであろう。全国のモデルとなるような展開を期待したい。